3.11 ソレカラ

～障害者・福祉職員の「あの日」と「ソレカラ」～

◎飛川義親さん（男性／当時40代／SMA［脊髄性筋萎縮症］）

子どもは良い意味で“障害者慣れ”している。あまり怖がらずに障害者と関わってほしい。

― 自宅の正面にはスロープが設置されている ―

―「障がい者ベース石巻にょっきり団」の事務所 ―

コミュニティ　震災を経て、近隣の方がいざという時に心強い存在となることを実感。

飛川さんが住む地域では、震災前から近隣住民が集まってバーベキューを楽しむなど、お互いの顔が見えるおつきあいがありました。大津波が来た時も、母親が近隣の方と一緒に避難したり、その後も津波警報が発表された時に、自宅に訪れて「逃げるよ！」と声をかけてくれたりしたこともありました。普段からのご近所づきあいが、いざという時に心強い絆・命綱になってくれる…飛川さん一家は改めて実感しました。

備え　震災の教訓を活かし、自助の力で災害を乗り越えるための備えを整える。

震災後、飛川さんの暮らしに変化がありました。震災前までは、車椅子からベッド等への移動は母親が飛川さんを背負って運んでいましたが、母親が腰と膝を痛めたため、移動が困難になりました。今は、移動は電動リフトや昇降機に頼っています。そのため自家発電機を導入し、停電になっても移動のための機器が使えるようにしました。また自宅の出入口にはスロープを取り付け、母親と弟が車椅子積載車に乗り替えるなど、できる限り家族の力で災害を乗り越える備えをしています。

また飛川さんは、避難バッグに必ず自分の薬を入れるようになりました。これも、震災の教訓から実践していることです。

活動　地域の福祉団体での活動から、子どもたちの福祉への関わり方の深さを知る。

飛川さんは今、障害当事者を中心にさまざまな人が集い、地域の障害福祉のために活動する「障がい者ベース石巻にょっきり団」に関わっています。相談窓口や情報交換の場として、またアートや外出などさまざまな活動を体験する場として活用しています。

飛川さんがにょっきり団に関わるようになって驚いたのは、子どもたちの福祉への関わり方が想像以上に深いということでした。小学校等では福祉研修が行われたり、道徳の時間に車椅子の操作や片麻痺の状態の体験を行ったりするなど、良い意味で“障害者慣れ”していると感じたといいます。「私たちの時代の子どもたよりも、今の子どもたちの方が福祉に関わっているし、車椅子を見ても案外何とも思っていないんです。こういう子どもたちが育ってくれれば、本当に日本っていいだろうなって思いますね」と、飛川さんは未来に思いを馳せます。

「障害者に対して、あまり怖がらずに関わってほしいですね。ちょっと体が動きにくいだけで、あんまり特別なものでもないと思うので。相手に一歩引かれてしまうと、私たちは何もいえなくなるんですよね。だから、普通でいいんですよ。過剰に“大丈夫ですか？大丈夫ですか？”と来られすぎるのも、それも大変です（笑）。でも緊急時はズカズカ来てもらった方がありがたい。その時の状況に合わせて、距離感を縮めてもらえると嬉しいです」。“障害者と健常者”ではなく“人と人”とのおつきあい。飛川さんは、そんな友好関係が広がることに期待しています。